

# 李白の「碧雲」と「緑雲」について

西村 諭

## はじめに

李白の「古風五九首（其七）」は、次のように神仙のイメージを詠った作品である。

客有鶴上仙	客に鶴上の仙有り
飛飛凌太清	飛飛として太清を凌ぐ
揚言碧雲裏	言を揚ぐ碧雲の裏
自道安期名	自ら道う安期の名
両面白玉童	両面白玉の童
双吹紫鶯笙	双 <small>なご</small> んで紫鶯の笙を吹く
去影忽不見	去影 忽ち見えす
回風送天声	回風 天声を送る
举首遠望之	首を挙げて遠く之を望めば

李白の「碧雲」と「緑雲」について

飄然若流星 飄然として流星の若し

願餐金光草 願わくは金光草を餐し

寿与天齐傾 寿 天と齊しく傾かん

宋の葛立方は『韻語陽秋』卷十一に次のように述べている。

李太白古風兩卷近七十編、身欲為神仙者、殆十三四。或欲把芙蓉而躡太清、或欲挾兩龍而凌倒景、或欲留玉鳥而上蓬山、或欲折若木而遊八極、或欲結交王子晉、或欲高揖衛叔卿、或欲借白鹿於赤松子、或欲餐金光於安期生。

最後の「或欲餐金光於安期生」というのが、この詩の第四句目及び第十一句目を意識しての発言であることは明らかである。確かにこの詩は神仙のイメージを含む語句を多く使っており、内容の面から見ても遊仙詩と考えてよいだろう。ところでこの作品は、李白の詩文集として今日得られる最古のテキストである宋版『李太白文集』三十卷（静嘉堂文庫所藏、「唐代のしおり」所収影印本）では、一本に次のように作ると伝える。

五鶴西北来、飛飛凌太清。仙人緑雲上、自道安期名。兩兩白玉童、双吹紫鸞笙。飄然下倒景、倏忽無留行。遺我金光草、服之四体輕。將隨赤松去、對博坐蓬瀛。

それぞれを比較すると、前半部分は内容に関わるほどの大きな違いはないが、後半部分はいちじるしく異なっている。李白の作品はテキストによつて文字の異同がかなりあるのだが、ここまで違つと、あるいは別々の詩として作られたのではないかと思われるほどである。こうしたテキスト間の大きな異同が李白の詩に比較的多く見られるのは、鈴木修次氏が「李白詩の伝承に関する一考察」（『漢文学会会報』二十二号、一九六三年）の中で論証しているように、李白の詩が彼の生存中、およびその死後において、多くの人々に愛唱され、生きた文芸として口から口へと伝承されたことによつて、多くの異本が生まれたからであろう。

さて、それぞれの前半部分を見たときに、三句目の「碧雲」が一本では「緑雲」に作つてあることに気付く。いずれも「みどりの雲」ではある

のだが、その「みどりの雲」とはどのような雲を言うのだろうか。そもそも「碧雲」と「緑雲」は同じものと考えて良いのだろうか。本稿では、李白の詩に見える「碧雲」「緑雲」の用例、ならびに他詩人の用例をそれぞれ比較検討することで、「碧雲」と「緑雲」の語のもつイメージを明らかにすると同時に、李白の「碧雲」「緑雲」の語の特徴を明らかにしたい。なお、本稿で引用する李白の詩は、原則として、前出の静嘉堂文庫所蔵の宋版本『李太白文集』三十巻の影印本を底本とする。

## 一 李白以前の「碧雲」の用例について

李白の「碧雲」について考察する前に、李白以前に見られる「碧雲」の用例を探ると、『詩経』、『楚辞』には用例は見えず、唐代以前には、梁の江淹の、次の一例しか見えない。

西北秋風至	西北より秋風至り
楚客心悠哉	楚客 心 悠たるかな
日暮碧雲合	日暮れて碧雲合するも
佳人殊未来	佳人 殊に未だ来らず
露采方汎豔	露采 方に汎豔たり
月華始徘徊	月華 始めて徘徊す
宝書為君掩	宝書 君が為に掩い

李白の「碧雲」と「緑雲」について

瑤琴詎能開

瑤琴 詎ぞ能く開かん

相思巫山渚

相思う 巫山の渚

悵望陽雲台

悵望す 陽雲の台

膏鍼絶沈療

膏鍼に沈療絶え

綺席生浮埃

綺席に浮埃生ず

桂水日千里

桂水 日に千里

因之平生懷

之に平生の懷いを因らしむ (雜体詩三十首 (其三十一) 休上人 別怨) 『文選』卷三十一)

江淹のこの作品は『玉台新詠』卷五にも収録されている。休上人とは僧惠休、すなわち宋の湯惠休の作に擬したものである。この詩の内容は、秋の夕暮れに、旅にある者が、思い慕う人物のいつまでも来ないことを嘆いたものである。李善はこの句の出典として、魏の文帝の「秋胡行」(『魏詩』卷四)に見える「朝与佳人期、日夕殊不来」の句を挙げているが、「碧雲」に対しては特に注を記していない。六臣注では、張銑が「碧雲は青雲なり」と注をしている。この句で夕暮れ時を詠っていることをふまえると、江淹の詩の「碧雲」は、夕暮れ時の雲とみて問題はないだろう。

さて、唐代に入つて李白以前の用例を求めると、初唐の鄭世翼に

飛觀紫煙中

飛觀は紫煙の中

層台碧雲上

層台は碧雲の上 (『登北邙還望京洛』『全唐詩』卷三十八)

とあり、また、李恆に

宝地隣丹掖 宝地は丹掖に鄰し

香台瞰碧雲 香台は碧雲を瞰す（奉和九月九日登慈恩寺浮図応制）『全唐詩』卷一百五

とある。いずれの「碧雲」も、建物の高さを強調するために用いられている点で、その発想は同じである。また、その建物が、作者にとって非日常的で神聖な場所であることも注目してよいだろう。両者の「碧雲」はそれぞれ「紫煙」、「丹掖」と対を成し、また、その対象となる場所と対応して、神秘的なイメージを含んで詠われていることが指摘できる。唐代における李白以前の用例は以上の二例のみである。

## 二 李白の「碧雲」の用例について

花房英樹『李白歌詩索引』（京都大学人文科学研究所、一九五七年）によれば、李白の作品における「碧雲」の用例は十一例ある。それらの用例をみると、李白における「碧雲」が、最初に挙げた「古風」詩のような神仙のイメージを、必ずしも含んでいるわけではないことに気付く。

乱流新安口 乱流 新安口

北指巖光瀨 北に指す巖光瀨

釣台碧雲中 釣台 碧雲の中

邀与蒼嶺对 邀かに蒼嶺と対す（送王屋山人魏万還王屋）

「釣台」はすなわち徹子陵の釣台。その釣台は「碧雲」の中にあり、はるか遠く蒼嶺山と対峙していると詠う。釣台の高さを表現したものである。同時に、釣台を神聖な場所として捉えてもいよう。前出の鄭世翼、李恆に通ずるものである。高さを表す用例ではないが、神聖な場所を表すものもある。

回鞭指長安

鞭を回して長安を指せば

西日落秦関

西日 秦関に落つ

帝郷三千里

帝郷 三千里

杳在碧雲間

杳として碧雲の間に在り（「登敬亭北二小山余時送客逢崔侍御并登此地」）

『莊子』天地第十二に「千歳厭世、去而上僊、乗彼白雲、至于帝郷」とあるが、この詩の「帝郷」は長安の都であり、特に神仙のイメージを含むものではない。しかし、作者にとって長安の都はやはり神聖な場所であり、それが「碧雲」の間にあると詠っているのは前の詩の「釣台」の場合同じだ。それと同時に、「帝郷」が遠くにあるということが「三千里」、「杳」という語からわかる。つまり「碧雲」に隔てのモチーフが使われているのであって、その意味では次に挙げる用例も同じである。

青楼何所在

青楼 何れの所にか在る

乃在碧雲中

乃ち碧雲の中に在り（「寄遠十一首（其二）」）

詩題からもわかるように、遠くにある人を想う詩である。我が想う人のいる楼閣はどこにあるかといえ、遠く手の届かない「碧雲」の中にあ

ると詠う。隔てのモチーフを用いたものだ。以上の用例をみて気付くことは、その対象となる場所が神聖な場所であればあるほど、「碧雲」はより神秘的なイメージを含むし、その場所が作者あるいは当事者にとつて遠く手の届かない場所であれば、「碧雲」はその間を隔てる存在として、すなわち隔てのモチーフとして詠われる。しかしこれは李白の用例に限られたことではなく、盛唐の詩人にも見えるものである。

是時春載陽 是の時 春 載陽たり

佳氣滿皇州 佳氣 皇州に満つ

宮殿碧雲裏 宮殿 碧雲の裏

鴛鴦初命儔 鴛鴦 初めて儔を命ず (儲光毅「夏日尋藍田唐丞登高宴集」『全唐詩』卷一百三十七)

明月異方意 明月は異方の意

吳歌令客愁 吳歌 客をして愁えしむ

鄉園碧雲外 鄉園は碧雲の外

兄弟滌江頭 兄弟は滌江の頭 (常建「江行」『全唐詩』卷一百四十四)

儲光毅の「碧雲」は、宮殿という神聖な場所との関係から神秘的なイメージを多分に含むし、逆に常建の「碧雲」は、故郷との間に存在する隔てのモチーフとして詠われている。

「碧雲」が神秘的なイメージを持つのは、『説文解字』一篇上に「碧、石之青美者」とあるように、「碧」が本来青く美しい宝玉を指す語であることとおそらく無関係ではあるまい。したがって神秘的なものとして詠われる場合には、重点は「雲」よりも「碧」の方にあるだろう。一方、「碧

「雲」が隔てのモチーフとして詠われる用例は、例えば前漢の蘇武の作と伝えられる詩に「俯觀江漢流、仰視浮雲翔。良友遠離別、各在天一方」(『文選』卷二十九)とあるように、行く雲と遠くにある人とを結びつける、古くからみられるものだ。この場合、重点は「碧」よりも「雲」の方にある。

ところで、李白のこうした用例、すなわち「碧雲」を神秘的なものとして詠ったり隔てのイメージを付加した用例は、確かに李白における「碧雲」の特徴的な用例ではあるが、その一方で、「碧雲」を叙景物、すなわち、特に象徴性を含ませることなく、自然物として目に映る雲を詠った用例もある。実は「碧雲」に神秘的なイメージを抱いて詠うのは盛唐の頃までで、中唐以降に詠われることはあまりないようだ。のちに述べることだが、中唐以降では多く、隔てのモチーフとしての用例と、叙景物としての用例に二分される。例えば後出の錢起には八例「碧雲」の用例が見えるが、神秘的なイメージを持った用例は見えず、その多くが夕暮れ時、あるいは夜の雲といった叙景物としての用例である。しかし、次に挙げる李白の叙景物としての用例は、錢起をはじめ、李白以後の用例とは一線を画すものである。

試発清秋興 試に発す 清秋の興

因為與会吟 因りて為す 與会の吟

碧雲斂海色 碧雲 海色を斂め

流水折江心 流水 江心を折る (『送曲十少府』)

關氏黃葉落 關氏 黃葉落ち

妾望白登台 妾は望む 白登台

海上碧雲斷 海上 碧雲断ち



单于秋色来 单于 秋色来る（「秋思」）

上有好鳥相和鳴 上に好鳥の相和鳴する有り

閒関早得春風情 閒関として早に春風の情を得たり

春風卷入碧雲去 春風卷いて碧雲に入りて去り

千門万户皆春声 千門万户 皆な春声（「侍従宜春苑奉詔賦龍池柳色初青聽新鶯百轉歌」）

魚龍動陂水 魚龍 陂水を動かす

処処生波瀾 処処に波瀾を生ず

天借一明月 天は一明月を借し

飛来碧雲端 飛び来る碧雲の端（「遊秋浦白筍陂」二首（其二））

いずれも自然のうちに詠った、つまり、典故などを利用して詠った用例である。李白以後、叙景物としての「碧雲」がほとんど夕暮れ時の雲をいうのに対し、最後の用例を除けば、いずれの「碧雲」も夕暮れ時の雲とは限らない。時間よりもむしろ季節と深く関わり用いられている。「送曲十少府」詩の「碧雲斂海色」の句は、「碧雲」を海の色をもって形容するといった李白独特の表現だし、「侍従宜春苑奉詔賦龍池柳色初青聽新鶯百轉歌」詩の「春風卷入碧雲去」の句は、春風が鳥のさえずる声を巻き上げて碧雲に入っていくといった、躍動感あふれる表現である。「遊秋浦白筍陂」詩の「碧雲」は夜の雲であるが、その雲に月が上ってきた様子を、天が明月を借りて雲の端に持ってきたのだと、想像力豊かに詠う。以上のような「碧雲」の描写は、李白以前、あるいは李白周辺詩人には見られなかったし、李白以後にも見られない表現である。

### 三 李白以後の「碧雲」の用例について

李白以後の「碧雲」の用例は多く、隔てのモチーフとしての用例と、叙景物としての用例に二分されることは先に述べたが、さらに隔てのモチーフを用いた用例においては、江淹の「日暮碧雲合、佳人殊未來」の句を意識したものが多くみられる。

楚客在千里 楚客千里在在り

相思看碧雲 相思いて碧雲を見る（皇甫曾「秋興」『全唐詩』卷二百十）

願以碧雲思 願わくは碧雲の思いを以て

方君怨別余 君が怨別の余と方べよ（韋応物「寄皎然上人」『全唐詩』卷一百八十八）

皇甫曾の詩の「楚客」「千里」「相思」「碧雲」は、いずれも江淹の詩に使われている語句であり、作者が江淹の詩を多分に意識していたことがわかる。また韋応物の詩では、皎然が中唐の詩僧であることから、韋応物と皎然の関係を、江淹と湯惠休に擬して詠ったことは想像に難くない。「迴首碧雲深、佳人不可望」（権徳輿「晚渡揚子江却寄江南親故」『全唐詩』卷三百二十五）や「洛橋碧雲晚、西望佳人期」（劉禹錫「酬令狐相公新蟬見寄」『全唐詩』卷三百五十八）といった用例も隔てのモチーフを用いたものであり、江淹の詩を意識したものである。

先にも述べたが、錢起には、「碧雲」の用例が八例見える。これまで見てきた李白以外の詩人における「碧雲」の用例が、それぞれの詩人において二、三例程度にとどまることをふまえると、錢起の八例という用例は多いと言ってよいだろう。それらを見ると、隔てのモチーフを用いたも

のは「遠宦碧雲外、此行佳興牽」(『送沈少府還江寧』、『全唐詩』卷二百三十七)の一例のみで、あとはみな叙景物として詠われていることに気付く。そしてそのほとんどが夕暮れ時あるいは夜の雲である。「簷前碧雲靜如水、月弔樓烏啼鳥起」(『效古秋夜長』、『全唐詩』卷二百三十六)、「楚鄉飛鳥沒、獨与碧雲還」(『送夏侯審校書東歸』、『全唐詩』卷二百三十七)、「別筵寒日晚、歸路碧雲生」(『送田倉曹歸觀』同)、「終朝碧雲外、唯見暮禽還」(『山園秋晚寄杜黃裳少府』、『全唐詩』卷二百三十八)といった具合である。

叙景物としての「碧雲」について、錢起の用例と李白の用例を比較すると、錢起の「碧雲」は夕暮れ時や夜といった、「時間」に関わるものであるのに対し、李白の用例が「季節」と結びついている点で異なることが指摘できよう。

#### 四 李白以前ならびに李白周辺詩人の「緑雲」の用例について

次に、「緑雲」について考えてみたい。「緑雲」の語の用例は、唐代以前には宋の鮑照に一例、初唐期には沈佺期に一例、盛唐期には、李白以外には儲光羲に一例しか見出せない。一方、『李白歌詩索引』によれば、李白には「緑雲」の語の用例が九例ある。このことは、李白が「緑雲」に対して何らかの独自のイメージを抱いていたことを示すだろう。まず、「緑雲」の最初の用例である鮑照の詩をみる。

鳳樓十二重	鳳樓	十二重
四戸八綺窓	四戸	八綺の窓
繡栢金蓮花	繡栢	金の蓮花
桂柱玉盤龍	桂柱	玉の盤龍
珠簾無隔露	珠簾	露を隔つるなく

李白の「碧雲」と「緑雲」について

羅幌不勝風 羅幌 風に勝えず

宝帳三千所 宝帳 三千万

為爾一朝容 爾が一朝の容の為なり

揚芬紫煙上 芬を揚ぐ紫煙の上

垂綵緑雲中 綵を垂る緑雲の中

春吹回白日 春吹 白日を回らし

霜歌落塞鴻 霜歌 塞鴻を落とす

この作品は『玉台新詠』巻四では「代京洛篇」、『樂府詩集』卷三十九では魏の文帝の「煌煌京洛行」の次に「同前」として並べてある。その『樂府解題』に「始則盛称京洛之美、終言君恩歇薄、有怨曠沈淪之歎」とあるのがこの詩の内容で、右に挙げたのはその前半、すなわち京洛の華麗な様子を写した部分である。「揚芬紫煙上 垂綵緑雲中」の句は、豪華な楼閣、その中で歌舞する美しい宮女のさまをイメージしたものである。ただ、直接的には女性の香り、美しい着物を表す「芬」「綵」に宮女のイメージを見るのであって、「紫煙」「緑雲」はそれらを引き立てる役割をもつものだ。続いて、初唐の沈佺期の「緑雲」の用例は次のごとくである。

金輿旦下緑雲衢 金輿 旦に下る緑雲の衢

綵殿晴臨碧澗隅 綵殿 晴に臨む碧澗の隅（嵩山石淙侍宴应制）『全唐詩』卷九十六

この詩は陶敏、易淑瓊校注の『沈佺期集校注』巻一（中華書局、二〇〇一年）によれば、作者が則天武后に侍従して作った詩のようだ。道の両

側に緑葉が雲のように茂っている中を、武后を載せた車が通っていくさまを描写したものである。この詩における「緑雲」は、緑葉の盛んに茂ったさまを表現している。

李白以前の用例は以上の二例であり、それぞれのイメージは同じではない。盛唐の儲光羲の「緑雲」も、先立つ二例の用例とは異なるものである。

標隨緑雲動

標は緑雲に隨いて動き

船逆清波來

船は清波に逆らいて來る（「觀競渡」『全唐詩』卷一百三十九）

この詩は、汨羅の淵に身を投じた屈原の靈をなぐさめるのが起こりと言われる、端午の節句の行事である舟の競争のありさまを詠ったもので、舟が水の上を進む様子を描写した句である。「標」は舟のへさきに飾られた旗であろう。それが「緑雲」とともに移動すると詠う。この「緑雲」は自然物として空に浮かぶ雲、すなわち叙景物であって、実景である。何かを象徴するようなものではない。

以上の三者の用例を比較すると、そこには「緑雲」に対する共通のイメージは見られない。次に、李白の用例を見る前に、李白以後の用例を先に見ることにする。

## 五 李白以後の「緑雲」の用例について

李白以後における「緑雲」の用例もそれほど多いものではない。例えば李端に一例、孟郊に一例、楊巨源に三例、劉禹錫に一例、元稹に一例、白居易に三例などである。まず、孟郊の用例を見よう。

奕奕秋水傍 奕奕たり秋水の傍

駸駸緑雲蹄 駸駸たり緑雲の蹄

月仙有高曜 月仙に高曜有り

靈鳳無卑棲 靈鳳に卑棲無し（寄院中諸公）『全唐詩』卷三百七十八

「駸駸緑雲蹄」の句について陳延傑は『詩經』小雅「四牡」の「駕彼四駟、載驟駸駸」を引き、「緑雲蹄謂鳳」と注を施している（『孟東野詩注』卷七、新文豊出版）。毛伝に「駸駸、驟貌」とあり、『説文』に「驟、馬疾歩也」とあることから、「駸駸緑雲蹄」は馬が疾走するさまを表現している。つまり院中の諸公の乗る馬を鳳凰になぞらえて「緑雲」と表現しているのである。だが、この孟郊の「緑雲」は他詩人の用例と比較するとむしろ特異な用例で、他詩人の用例は大きく二分できる。まず一つは、前出の沈佺期の用例と同じく、緑葉の盛んに茂った様子を表すものである。白居易には「緑雲」の用例が三例あるが、そのうちの一例を挙げよう。

一株青玉立 一株 青玉立ち

千葉緑雲委 千葉 緑雲委す（雲居寺孤桐）『全唐詩』卷四百二十四

雲居寺の庭にそびえる桐を詠った詩。「緑雲」は、その葉の盛んに茂っているさまを表している。また、劉禹錫に「朱檻照河宮 旗亭緑雲裏」（送湘陽熊判官孺登府罷歸鍾陵因寄呈江西裴中丞二十三兄）『全唐詩』卷三百五十四とある。これは、酒屋が樹木に囲まれた所であることを詠っており、「緑雲」はやはり、樹木の葉の盛んに茂ったさまを表している。

さて、白居易の残る二例は「宋家宮様髻、一片緑雲斜」（和春深二十首〔其七〕）『全唐詩』卷四百四十九、「眉殘蛾翠淺、鬢解緑雲長」（江南喜逢蕭九徹因話長安旧遊戲贈五十韻）『全唐詩』四百六十二といったものだが、いずれの「緑雲」も女性の髪を表している。これが「緑雲」のいま一つの用例であり、女性の美しい髪を表す場合に用いられるものである。李端の「妾薄命」に次のようにある。

憶妾初嫁君 憶う 妾初めて君に嫁ぎしとき

花鬢如緑雲 花鬢 緑雲の如くなるを（『全唐詩』卷二百八十四）

「花鬢」、すなわち美しい髪を、「緑雲」をもって形容している。『詩經』鄘風「君子偕老」に「鬢髮如雲、不脣鬢也」とあり、毛伝に「鬢、黒髪也。如雲、言美長也」とある。髪 of 美しいさまを雲に喩えて表現するのは『詩經』の時代にすでに見えていたものだ。ただ、『詩經』と「妾薄命」の用例は、本来まったく別の存在である。「花鬢」と「緑雲」を、「如」の語を使うことによつて形容しているのであるが、次に挙げる例では、「緑雲」の語だけで女性の髪という意味を獲得している。

春來削髮芙蓉寺 春來りて髪を削る芙蓉の寺

蟬鬢臨風墮緑雲 蟬鬢 風に臨んで緑雲墮つ（楊巨源「觀妓人入道二首〔其二〕」『全唐詩』卷三百三十三）

これは妓女が入道するのを詠った詩で、髪を剃り落とす様子を描写したものである。その切り落とされた髪を「緑雲」と詠っている。その他、「緑雲」が女性の髪を表した用例としては、「北人多識緑雲鬢」（楊巨源「大堤曲」『全唐詩』卷三百三十三）、「芙蓉脂肉緑雲鬢」（元稹「劉阮妻二首〔其二〕」『全唐詩』卷四百二十二）といったものがある。

以上のように、李白以後における「緑雲」の用例は、孟郊の用例を除けば、緑葉の茂った様子を表すものと、女性の美しい髪を表すものに二分される。

## 六 李白の「緑雲」の用例について

これまで見てきた他詩人の用例を踏まえた上で李白の「緑雲」の用例をみると、ひとまず次のような分類が可能である。

- (一) 高さを強調するもの
- (二) 盛んに茂る緑葉をいうもの
- (三) 女性の美しい髪をいうもの

以下、順を追って検討を加えていく。

### (一) 高さを強調するもの

日照錦城頭	日は照らす錦城の頭
朝光散花樓	朝光 散花樓
金窓夾繡戸	金窓 繡戸を夾み
珠箔懸銀鉤	珠箔 銀鉤を懸く
飛梯綠雲中	飛梯 緑雲の中



極目散我憂

極目 我が憂いを散す（「登銅城散花樓」）

樓閣の様子を描写した三、四句目は、前に見た鮑照の作品における樓閣の描写に通じるところがある。しかし、「緑雲」についてみれば、鮑照の「緑雲」が、樓閣の豪華さや宮女の美しさと同様のあるものであったのに対し、李白のこの詩の「緑雲」は、樓閣の高さを強調するもので、鮑照の用例と同じではない。むしろ、空に浮かぶ雲という点では儲光羲の用例に共通するし、高さを強調する点では、「碧雲」の用例でみた「釣台碧雲中 逸与蒼嶺対」（「送王屋山人魏万還王屋」）と同じ表現方法である。高さを強調する「緑雲」の用例は、他詩人には見られないものであるが、李白の用例の中でもこの一例のみで、李白の「緑雲」に対するイメージを決定付けるものとは言い難い。

(二) 盛んに茂る緑葉をいうもの

蹇予未相知

蹇予未だ相知らず

茫茫緑雲垂

茫茫として緑雲垂る（「酬岑助見尋就元丹丘对酒相待以詩見招」）

帝子泣兮緑雲間

帝子泣く緑雲の間

隨風波兮去無還

風波に随いて去りて還る無し（「遠別離」）

慟哭兮遠望

慟哭して遠く望めば

見蒼梧之深山

蒼梧の深山を見る

蒼梧山崩湘水絶

蒼梧 山崩れて湘水絶えなば

竹上之涙乃可滅 竹上の涙 乃ち滅すべし

いずれも緑葉の茂った様子を表している。「遠別離」の「帝子」は、『楚辭』九歌「湘夫人」に「帝子降兮北渚」とあり、王逸の注に「帝子謂堯女也」とあるところの「帝子」と同じである。すなわち、堯帝の二人のむすめ、娥皇と女英をいう。「竹上之涙」は『述異記』巻上に「昔舜南巡而葬於蒼梧之野、堯之二女娥皇女英追之不及、相与慟哭、淚下沾竹、竹上文為之斑斑然」とあるのを踏まえたものである。つまりこの詩における「緑雲」は、竹の葉の茂った様子を言うものであることがわかる。

(三) 女性の美しい髪をいうもの

長吁不整緑雲鬢 長吁整えず緑雲鬢

仰訴青天哀怨深 仰いで青天に訴えて哀怨深し（『白頭吟其二』）

歌鼓燕趙兒 歌鼓 燕趙の兒

魏妹弄鳴糸 魏妹 鳴糸を弄す

粉色艶日彩 粉色 日彩よりも艶なり

舞袖扞花枝 舞袖 花枝を扞う

把酒願美人 酒を把り美人を願み

請歌邯鄲詞 請う邯鄲の詞を歌わんことを

清箏何續繞 清箏 何ぞ續繞たる

度曲綠雲垂 曲を度して綠雲垂る（「邯鄲南亭觀妓」）

「邯鄲南亭觀妓」詩の「度曲綠雲垂」の句について詹鍇氏は「綠雲、形容女子髮多而黑」と注を施している（『李白全集校注彙集集評』卷十八）。妓女の姿を描写している内容だから、この「綠雲」は妓女の髪を表したものとする解釈は妥当であろう。だとすれば、女性の髪を「綠雲」と表現したのは、李白を嚆矢とする。しかし、髪を雲で形容するのは、前にも述べたように、すでに『詩經』に「鬢髮如雲、不厠鬢也」と見えるし、齊の王融「和南海王殿下詠秋胡妻詩」（『齊詩』卷二）に「搔首亂雲髮」とあり、同じく齊の謝朓「鏡台」（『齊詩』卷四）に「插花理雲髮」とあるように、「雲髮」という熟した語が早い時期から用いられているのである。また、髪を毛を緑色で表すものも、晋の清商曲辭「冬歌十七首」（其十七）に「白髮綠髮生」（『晋詩』卷十九）と見える。つまり、髪を毛、雲、色彩の緑の三者はいずれも結びつきやすいものであって、「綠雲」の語を用いて髪を毛を表す表現が、必ずしも新しいイメージを打ち出したものであるとは言えないだろう。

以上、李白の「綠雲」については、ひとまず次のことが言える。まず、高さを強調する表現は、他詩人には見られないものの、「碧雲」で見た用例に通じるものがある。次に、緑葉の茂ったさまを表す用例は、沈佺期からの直接の影響の有無は別としても、後代にそのイメージを確かに伝えていく。そして、女性の髪を表す用例については、おそらく李白の用例が最初ではあるが、このことについては先に述べたとおりで、李白が新しいイメージをもってこの語を使用したというわけではない。だが、残る李白の「綠雲」の用例を見たとき、他詩人には見られない、李白の用例に特徴的なこととして指摘できるのは、神仙との関わりにおいて「綠雲」の語を用いていることである。

#### （四）神仙との関わりにおいて用いられるもの

李白の「碧雲」と「綠雲」について

嘗聞秦帝女

嘗て聞く秦帝の女

伝得鳳凰声

鳳凰の声を伝え得たりと

是日逢仙子

是の日 仙子に逢う

当時別有情

当時 別に情有り

人吹彩簾去

人は彩簾を吹いて去り

天借緑雲迎

天は緑雲を借して迎う

曲在身不返

曲在るも身返らず

空余弄玉名

空しく余す弄玉の名（「鳳台曲」）

これは、蕭史と弄玉の二人が鳳凰に乗って登仙したことを詠う。蕭史と弄玉については『列仙伝』巻上に次のような記述がある。

蕭史者、秦穆公時人也。善吹簾、能致孔雀白鶴於庭。穆公有女字弄玉、好之、穆公遂以妻焉。日教弄玉作鳳鳴。居数年、吹似鳳声、鳳凰来止其屋。公為作鳳台、夫婦止其上、不下数年、一旦皆隨鳳凰飛去。故秦人為作鳳女祠於雍宮中、時有簾声而已。

この『列仙伝』の話によれば、蕭史、弄玉が鳳凰に乗って登仙したところを、李白においては、天が「緑雲」をもって迎えにきたと想像力豊かに表現する。とすると、詩の主題こそ違うものの、前出の孟郊「寄院中諸公」詩の「緑雲蹄」が鳳凰を指すというのもうなずけるし、孟郊の表現に李白の影響があつたかもしれないということも指摘できよう。また、「仙人十五愛吹笙、学得昆丘彩鳳鳴」と始まる「鳳笙篇」では

重吟真曲和清吹

重ねて真曲を吟じ清吹に和し

却奏仙歌響緑雲

却て仙歌を奏して緑雲に響く

緑雲紫氣向函関

緑雲紫氣 函関に向う

訪道応尋縦氏山

道を訪<sup>と</sup>わば応に縦氏山を尋ぬべし

と、「緑雲」が二度用いられている。この詩は仙人王子晋にまつわる内容のもので、王子晋については『列仙伝』に「王子喬者、周靈王太子晋也。好吹笙作鳳凰鳴。遊伊洛之間、道士浮丘公、接以上嵩山、三十余年。後求之於山、見桓良曰、告我家、七月七日待我於縦氏山頭。果乘白鶴駐山顛。望之不到、举手謝時人、數日而去。後立祠於縦氏山及嵩山」とある。また「紫氣向函関」は、『芸文類聚』卷七十八、靈異部、仙道に引く「関令内伝」に「関令登樓四望、見東極有紫氣西邁、喜曰、夫陽氣尽九、星宿值合、歲月並王、復九十日之外、法応有聖人經過京邑。至期、乃齋戒。其日果見老子」と見える。この「紫氣」とともに函関に向かう「緑雲」は、仙歌が響き渡るところであると詠う。また、「寄上真王三首（其一）」では

淮王愛八公

淮王 八公を愛し

携手緑雲中

手を携う緑雲の中

とある。「淮王」はすなわち淮南王劉安のことで、『太平広記』卷八に引く『神仙伝』に「淮南王劉安、好方術之士、於是有八公詣門、皆鬚眉皓白。……（王）足不履、跣而迎、登思仙之台、執弟子之礼、北面叩首、……八公曰、可以去矣。即白日昇天。八公与安所踏山石皆陷成跡」と見える。つまり、「携手緑雲中」は劉安が八公とともに登仙したことを詠っており、ここでの「緑雲」は仙界を表していると考えてよい。

「鳳台曲」では登仙する際の乗り物、「鳳笙篇」では空に浮かぶ雲、「寄上真王」では仙界と、それぞれの「緑雲」の指すものは異なっているが、いずれも神仙のイメージと結びついて用いられている点では同じである。これは孟郊を除けば他詩人に見出すことのできない点であつて、李白独

特の「緑雲」に対するイメージであることが指摘できる。

### おわりに

以上、「碧雲」と「緑雲」の用例をみてきたが、同じ「みどりの雲」であっても、それぞれの持つイメージの間には、少なからぬ違いがあるということが確認できたと思う。「碧雲」は、最初の江滝の用例こそ夕暮れ時の雲であるのだが、それが初唐期には神秘的なイメージを含んで用いられ、時代を降るにつれて、やはりもとの夕暮れ時の雲を表すようになっていった。しかもそれは、最初の用例である江滝の詩を多分に意識したものであって、このことは、中唐の許康佐が「日際愁陰生、天涯暮雲碧。重重不辨蓋、沈沈乍如積」(『日暮碧雲合』『全唐詩』卷三百十九)と、江滝の「日暮碧雲合、佳人殊未来」の句を句題として取り上げているのが象徴的に表している。一方「緑雲」は、李白以後においては、女性の美しい髪を表すものと、緑葉の茂ったさまを表すものの、二つの意味に用いられる。最初の用例である鮑照の「緑雲」が女性の美しい姿と無関係ではないのだが、それが「碧雲」の場合ほど直接的に後代に影響を与えたとは考えにくい。

このような「碧雲」ならびに「緑雲」それぞれの詩語の持つイメージの変遷の中であって、李白のそれぞれの用例は、やはり注目し値するものである。「碧雲」については、李白が叙景物として詠うとき、夕暮れ時の雲を詠うのではなく、季節と結びつけることによって、時に想像力を豊かに働かせ、李白特有の「碧雲」を表現し得ている。「緑雲」については、女性の髪を表す用例の嚆矢となっており、神仙との関わりにおいて空想性豊かに詠うのは、これもまた李白独特の表現であって、他の追随を許さないものである。そしてそこには、詩語の持つイメージをいかに吸収し、いかに新しいイメージを開拓するかといった、李白の表現態度の一端が表れているのである。